

# 文字媒体は

## 「文字通り」のことだけ伝える うすっぺらな役割へ

寄稿  
吉田恭子



© Lucas Foglia

大学で文学をやるなんて無意味？ それは端的に言うくと、「グローバル人材」養成所以外のなにものでもない大学において文学を読むことは無駄だと見切る余裕のなさの反映であろう。

実は今わたしたちは大量イリテラシー時代の幕開けにいる。イリテラシーとは識字力の欠如。文字言語の読解力は当たり前のものではなくなりつつある。

インド工科大学教授で詩人のルクミニ・バヤ・ナイールによると、高度な情報伝達では文字通りの言質に加えて言外の情報が複雑に層をなしている。印刷技術が発達した近代以降は文字が微細で込み入った情報伝達の主役となり、言語表現と読解の技巧が洗練されてきた。だが今日、重層的な情報伝達の手段が文字から映像に取って代わったため、文字媒体は「文字通り」のことだけを伝えるうすっぺ

## 一方で増え続ける創作科と書き手

らな役割へと変化しつつあるという。「7時に天神地下街中央インフォメ前で待ち合わせ」という具合に。そのため「文字通り」の識字力だけに頼り、たとえば換喩や寓意やパロディーのような複雑な修辞を読み取る力が欠落していく。この現代的識字危機の波は学歴を問わず、エリート層をもさらっていく。

彼女の話は衝撃的だった。あまりにも腑に落ちたからだ。大学に勤めていて痛感する。学生ばかりか教える側も

読むことについて驚くほど無防備だ。肝心なことは文字通りそこにあるから見逃すものはなにもなく、検索すればよい、というわけだ。

と同時に、わたしはわくわくもした。目も覚めるような解放感を覚えた。文字言語が最も高度な情報伝達手段の地位から降りるのならば、文学が国民国家の威信を担う必要もなく、文学かくあれかしという抑圧からも解放される。そうして小説を書いたり読んだりすることは特殊技能となり、国民文化を支える営みなんかでなく、少数の物好きが勝手に遊ぶユミの世界……て、アレ？

もうそうなってる？

一方で、作家志望者は絶えない。アメリカ中で少なくな見積もって四百あるともいわれる創作科大学院はどこも満員御礼で、ハーバードのロースクールよりも入るのが難しいと言

よしだ・きょうこ 作家、翻訳家、立命館大学文学部准教授。アメリカ文学専攻。1969年、福岡県宗像市生まれ。京都大学を経てウィスコンシン大学ミルウォーキー校英文学科創作専攻修士号取得。著書に「ペースボールを読む」、短篇集「Disorientalism」。訳書にデイヴ・エガース「ザ・サークル」など。



九州芸術祭文学賞(小説)募集

文芸誌などの新人賞募集には多くの作品が寄せられる

る。日本でも文学新人賞の応募者数は優に千を越える。オンラインで自己出版も急増した。すでに英語圏に普及した創作科教授法は今や非英語圏の世界に広まりつつあり、日本でも創作専攻を持つ大学が増えた。香港、広州、ソウルには英語専門の創作科も設立された。

大洋は未だ開けられていない瓶詰めの手紙で溢れている。